

北海道安平町 有機農業推進協議会の取組と 畑作物栽培事例

2024年 1月15日

令和5年度オーガニックビレッジ全国集会
安平町有機農業推進協議会 会長 小路健男

自己紹介

- 1964年 茨城県日立市(60歳)妻・子5人
- 1985年 酪農学園大学 卒業
- 茨城県八郷の有機農場で約3年の研修・スタッフ
- ▶ ● 1991年に**単身**で現住所へ新規就農(有機)
- ▶ ● 2000年～3期 町議会議員
- ▶ ● 2001年 北海道有機農業協同組合 設立
- 2017年 安平町有機農業推進協議会 設立
- 2018年 全国有機農業推進協議会 理事

安平町 概要

【町概要】

- 人口 7330人 (4020世帯)
- 面積 237.1km²
- 農地面積 約5000ha
- アクセス
 - 新千歳空港から約17 k m
 - 札幌から約50 k m
- 主要産業
 - 農業、畜産、軽種馬

【農業概要】

	農家戸数	専業	兼業
1990年	392戸	202	192
2000年	306戸	181	125
2010年	227戸	152	75
2020年	204戸	126	78

平均耕作面積	安平町	北海道
2000年	21.1ha	—
2010年	23.2ha.	23.5ha
2015年	25.3ha.	26.5ha.
2022年	—	33 ha

安平町農政における有機農業の位置づけ

第2次 安平町総合計画(2017-2026)

安平町農業振興計画（2017年策定）

（4）意欲ある新規就農者の確保と育成の強化 [改善戦略①]

- ▶ 有機農業を特色の一つとする当町においては、北海道及び安平町における有機農業の普及推進を図るため、北海道や有機農業者等と連携して、さらなる受入れの拡大を目指していきます。
- ▶ 市場評価が高い地域ブランド農産物であるアサヒメロンについては、これまでの新規就農対策により追分アサヒメロン組合の組合員数が増加に転じる状況にあるなど好調であることから、ブランド継承対策として、引き続き推進していきます。

• 基本施策2 農産物を生産する総合力の向上

（3）環境に調和した農業の推進

- 環境と調和し、消費者の期待に応えるクリーン農業や有機農業を推進するとともに、自給飼料に立脚した畜産を推進します。
- 有機農業の一層の推進を図るため、北海道と連携し、「安平町有機農業推進協議会」を設立し、定住促進とあわせた体制づくりを支援します。

安平町有機農業推進協議会 の概要

- ▶ 設立 2017年（設立時会員は6戸12人）
- ▶ 会員数 9戸 17人（夫婦加入）
- ▶ 主な活動
 - ▶ ① 有機農業への新規参入者の育成・相談・確保
例) (新・農業人フェア等の就農相談会へ参加)
 - ▶ ② 新規参入者の受入れ活動
例) (研修受入れ、生産技術指導、助言指導など)
 - ▶ ③ 有機農業振興に関する事業
例) (パンフレット・パネル・のぼり作成など)
 - ▶ ④ 道の駅・学校給食等へ供給事業
例) (道の駅農直に有機コーナー、小学校での食育授業)

町内での有機農業研修受け入れ実績(長期研修のみ)

就農実績、新規就農者の行政・JA等地域との協調性などがベースとなり
ボトムアップ方式で安平町は「オーガニックビレッジ宣言」が実現

- ▶ 1996年 N氏(独身)⇒奈良県で就農
- 2001年 K氏(独身)⇒栃木県で就農
- 2003年 T氏(独身)⇒古平町で就農
- 2004年 K氏(独身)⇒安平町で就農
- 2011年 M家族⇒安平町に移転就農
- 2013年 N家族⇒安平町で就農
- 2014年 S家族⇒安平町で就農
- 2016年 N家族⇒安平町で就農
- 「2017年 安平町有機農業推進協議会設立」
- 2019年 T家族⇒安平町で就農
- 2023年 S家族←研修中 2025年就農へ12ha確保
- 2024年 S家族←研修受け入れ 2026年就農予定

安平町内 有機農業者データ (2024年～有機JAS面積割合1.64%へ)

	就農年	主な栽培品目	就農時有機面積 2640 a	現在有機面積 約 8220 a
小路農園	1991年 新規就農	大豆・小麦・南瓜・ゴボウ・人参・長芋・米	有機 220 a	有機 1200 a
M農園	2000年 新規就農	トマト・キュウリ・大豆・南瓜	有機 200 a	有機 350 a
K農園	2004年 新規就農	養鶏600羽・米・多品目	有機 170 a	有機 170 a
N農園	2013年 新規就農	大豆・小麦	有機 450 a	有機 2700 a
S農園	2014年 新規就農	養鶏1000羽・蕎麦 小麦・飼料作物	有機 200 a	有機 1000 a
N農園	2016年 新規就農	大豆・小麦・パプリカ・ピーマン	有機 750 a	有機 1000 a
T農園	2019年 新規就農	サツマイモ・南瓜 ほうれん草・なす	有機 200 a	有機 200 a
T農園	1989年 既存2代目	大豆・小麦・南瓜・馬鈴薯	2020年開始有機450 a (慣行栽培6550 a)	2024年～有機1400 a (慣行栽培5600 a)
M農園	— 既存3代目	豆・小麦・ビート	(慣行栽培約10,000a)	(慣行栽培約10,000 a) 2023年～有機200 a

安平町での有機栽培 畑作の取組み事例

大豆4ha・秋小麦4ha・緑肥(南瓜3ha)

	1年目	2年目	3年目	4年目	備考
パターン① 大豆・小麦	<p>小粒大豆 10月下旬収穫</p> <p>8月下旬秋小麦 を株間に播種</p>	<p>秋小麦 7月中旬収穫</p> <p>8月下旬までに 緑肥を播種 11月下旬鋤込み</p>	<p>小粒大豆 10月下旬収穫</p> <p>8月下旬秋小麦 を株間に播種</p>	<p>秋小麦 7月中旬収穫</p> <p>8月下旬までに 緑肥を播種 11月下旬鋤込み</p>	大豆作付け前 緑肥は クリムソクロー バー
パターン② 大豆・小麦・南瓜	<p>小粒大豆 10月下旬収穫</p> <p>8月下旬秋小麦 を株間に播種</p>	<p>秋小麦 7月中旬収穫</p> <p>8月下旬までに 緑肥を播種 11月下旬鋤込み</p>	<p>南瓜 9月上旬収穫</p> <p>9月下旬までに 緑肥を播種 11月下旬鋤込み</p>	<p>小粒大豆 10月下旬収穫</p> <p>8月下旬秋小麦 を株間に播種</p>	南瓜作付け前 緑肥はヘイオー ツ

大豆・小麦における有機栽培時の注意点

大豆)

- ① 元肥の施用は避ける ⇒ タネバエ対策
- ② 小粒大豆の作付け中心 ⇒ マメシンクイ蛾対策
- ③ 品種の選定と緑肥の使用 ⇒ 大豆シストセンチュウ対策
- ④ 機械除草技術の習得 ⇒ 労働力の削減(手除草の負担減)

秋小麦)

- 1. 発芽密度をそろえる ⇒ 無除草に
- 2. 9月上旬までの播種 ⇒ 越冬までの根張り・莖数確保、雪腐れ対策
- 3. 適時追肥 ⇒ 収量確保

※ 共通事項 ⇒ 輪作体系の維持
堆肥・緑肥の活用

大豆の生育過程 5/15播種

機械除草7回(培土式除草)
(発芽前と5/下～週1回7/上まで)

6/20



7/22



10/13



手除草は(拾い草程度)2回 のみ

有機栽培大豆・小麦の収益性と労働性など

	収量/反	単価/俵	ゲタ対策/反	有機/反	収益/反	備考
有機大豆	3.5俵	22,000円	20,000円	14,000円	111,000円	最低限の機械投資 低労働時間 防除なし
一般大豆	4俵	7,800円	20,000円	—	51,200円	
有機小麦	6俵	7,900円	20,000円	14,000円	81,400円	除草なし 作業は播種と収穫
一般小麦	10俵	3,400円	20,000円		54,000円	

- ▶ 参考) 畑作物直接支払交付金(ゲタ対策) 反2万円
- ▶ 環境保全型農業直接支払い交付金 反1.4万円(堆肥加算含む)
- ▶ ※ 水田での作付けの場合、水田活用直接支払交付金の加算あり

有機農産物の販売先として機能する 北海道有機農業協同組合

設立 2001年

組合員数 556名(正組合員 56名 准組合員500名)

有機認定圃場面積 約350ha

取扱高 約3.4億円(2022年)

販売先割合 ① 道内 65% 道外 35%

販売先割合 ② 量販店・小売店・卸 74%
直接販売(宅配事業) 26%

※ 安平町有機推進協議会9名中8名が組合員